

2017年9月17日(日)

説教:「神は無から造りたもう」

聖書:士師記7:1~8

ギデオンは大軍ミディアン人との戦いのため、民衆から兵士を集めた。その数三万二千人。心強い数だが、神はギデオンに言う。「あなたの率いる民は多すぎる」と。神は「恐れおののいている者は皆帰れ」というと二万二千人減り、一万人となった。さらに水辺において「犬のように舌で水をなめる者」は外され、手ですすってすすった者のみを良しとした。その数わずか三百人である。味方が“減る”ということは心細い。反対に“増える”というのは、なんとなくたのしいもの。ゆえに私たちは、いつも増えることを神に願うものであるが・・・。

福音書に「富める青年の話」がある。金持ちの青年がイエスを訪ねて来て、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と尋ねる。するとイエスは、律法を守りなさい、父と母を敬いなさいと言う。すると青年は「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と自負する。イエスは彼を見つめて、「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その青年はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからだと聖書は記す。

“減らす”とはどういうことなのか？ 神はギデオンに「手から水をすすった三百人をもって、わたしはあなたたちを救う」と約束された。ギデオンを救うのは、彼の兵士ではなく、主なる神が救うのだということである。聖書は、数の多さ、お金の多さが悪いと言っているのではない。私たちはどうしても、数の多さ、お金の多さ、目に見える力に頼りがちになる。目に見える力は、神を見えなくしてしまう。物の豊かさは、時に神を見ようとしないう人を造ってしまう。人が救うのではなく、神が私たちを救うことを覚えたい。

宗教改革者のマルチン・ルターは「神はこの世界を無から造り上げた。私たちもまた、無にならない限り、神は私たちの内に恵みを造りえない」と言う。神は無から造りたもうお方なのである。

もう一つ、お話しておきたい。この士師記は戦争の話をしているが、決して戦争が肯定されていいということではなく、戦争がテーマではない。今、北朝鮮のミサイル問題、核実験などによる軍事力の強化が進み、それに対抗するように日米韓の合同演習、防衛ミサイルの整備、配備が成され、戦争が引き起こされる状況が造られようとしている。このような軍事的脅威に晒される時、私たちは日本はもっと軍事力を強化したらいいのという風潮になる。政治家の中からも「日本も核武装した方がいい」という声が出てくる。原爆の怖さを

知る国でありながら、現実の軍事的脅威に被爆国であることの意義を忘れ、目に見える力に頼りがちになる。その時、神が見えなくなっている事に私たちは気づかなければならない。恐ろしいのは、互いに武力を強化し、威嚇し合う中で偶発的な暴発が起こり、戦争を引き起こしてしまうことである。米国トランプ大統領はその機会を狙っているとも言われている。戦争の正当化、口実である。そうならないように祈らなければならない。

ご存知だろうか。北朝鮮はかつて「東洋のエルサレム」と呼ばれていた。首都ピョンヤンには戦前キリスト者が多くいた。宣教師が遣わされ、神学校も複数あった。現在でも北朝鮮のクリスチャン人口は高く、割合は日本よりも多い。毎週日曜日には礼拝が守られている。勿論クリスチャンで有る無しに関係なく、北の国には、愛すべき人々が今日も生活している。私たちは、軍事力の脅威、強化にあおられ北朝鮮を敵視するのではなく、こういう時にこそ、そこに住む人々の顔を思い浮かべて、まことの平和を祈り続けたい。

私たちは、軍事闘争危機の最中で無力さを覚えるが、しかし、その無力さの中に神は居られ、神は無から造りたもうお方であることを覚えたい。(神谷)